

福岡藩主黒田斉溥と大坂銀主衆との面談に就いて

著者	藤井 甚太郎
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	10
ページ	2-13
発行年	1957-12-28
URL	http://hdl.handle.net/10114/11153

福岡藩主黒田斉溥と大坂銀主衆との面談に就いて

藤井甚太郎

筑前福岡藩主黒田家は、提封五十二万余石の国持衆、大名の一つであるが、諸藩同様、藩の財政は困難を極め、大坂の銀主と金融機関は頗る複雑なるものがあつた。昭和十年頃大阪在の有名な大名貸家食野氏の裔が享保の藩債返却の訴訟を黒田家に提起した時、予は証人として裁判所に呼び出されたことがあつた。此等の銀主町人に藩より与うる年々の扶持米は少額ではなかつた。此等金融関係の史料も大部の冊子が藩庫にあつたと思われるが、明治四年七月の藩難に遇つて多数散逸し、東京黒田本邸に残存した記録と、福岡黒田別邸に保管せられた記録類も、今度の空襲によつてほとんど焼尽し、二十年に亘る予の研究成果も灰となつて、今はただ僅かに残れる約百冊位の記録原本のみとなつた。其等残存冊子に記載せられている内、一般史学研究者に裨益するであろうと思われる一事項に就いて、史料紹介旁々茲に記述する。その一事項というのは、藩主が参勤の途上、山崎路によらず、態々大坂に立寄り、銀主等に面接する次第の巨細である。尙参勤道中の建銀、伊勢神宮への代参、道中諸藩主家との挨拶交換、道中の細目、木曾路道中等について稿を改めて記述したい。尙引拠した史料は、天保七年九月藩主黒田美濃守齊溥が、家督後初参勤の道中記録であつて、万事が手重であつたことを一言して置く。

齊溥が大坂に着いたのは天保七年十月八日であるが、天保七年丙申御参勤御道中日記以下日記と書し置く十月八日（晴）の条に

今朝七時早メノ御供揃ニ而西宮
御発駕尼ヶ崎神崎十双御小休ニ而、四時大坂御着、御滞座被遊

とあつて、「大坂御着之次第」に

御着之節御門前江罷出居申

備前屋 徳兵衛 同 熊次郎

陸士目付森 安平

右 川 端

とある。銀主一同が御出迎したと思われる。尤病氣等にて罷り出なかつた人もあった。大坂における公儀諸役人への御挨拶、大坂在役の藩士の御祝着言上等の記事は茲には省略するが、銀主共の中御居間にて面謁を許され御意の口上を供頭中老浦上彦兵衛より伝えたのは山中常坦、山中他次郎、広岡英左エ門、広岡久右エ門、天王子屋五郎兵衛、近江屋久右エ門、近江屋休兵衛、長田作兵衛、長田政次郎、天王寺屋忠次郎へであつて、御意の口上も夫々長短がある。最も鄭重を極めたのは山中常坦等への分であつて、

御銀用向他次郎申合、志を相立致出精、在勤役人中江無覆蔵深切ニ申談候趣委被 聞召奇特之至

御満悦被成候、依之御羽織被下候 御世帯繰彌御六ヶ敷候付、此節他次郎江以前之通御蔵元被 仰付候付而者猶又此先

御為宜出精有之候様被 思召候、此度大野忠右衛門被差越候条万端宜申談候事

とあつて、山中父子、広岡父子が各々御羽織頂戴に及んだ。天王寺屋五郎兵衛への御意口上は

御名代無差支受持 御奉行所江茂毎度罷出、御銀用等不相替出精之趣被 聞召、奇特之至被成御満悦候、彌出精有之候様被

思召候事

とある。以上は御居間にてのことであるが、次の面々は御広間において謁を許された。

永瀬七郎兵衛、薩摩屋仁兵衛、鳥屋市兵衛、近江屋権九郎、近江屋権兵衛、加島屋重郎兵衛、加島屋一平、加島屋一郎兵衛、加島屋安兵衛、天王寺屋伊太郎、牧村清蔵、天王寺屋平次郎、牧村龜次郎、鳥屋市十郎、食野次郎左エ門、鷹見右近エ門、為川半十郎、鴻池永助、同彦市、同伴七、加島屋七郎兵衛、同万七、同武兵衛、加島屋金兵衛、同九八郎、鳥橋元恒、尾張屋七兵衛、絵屋文次郎
で、浦上中老が御意の口上には軽重の差別が付けられてあつた。近江屋権兵衛への御意口上に

御銀用筋連々出精之趣被

聞召奇特之至

御満悦被成候御世帯繰別而御六ヶ敷御時節ニ付、此先彌御為宜出精有之候趣被

思召候今度大野忠右衛門被差越置候条万端宜申談候事

と、牧村清蔵、天王寺屋平次郎、牧村亀次郎には

代々不相替御出入之旨被

聞召候依之 御目見被 仰付候事

と。食野次郎兵衛、鷹見右近エ門、為川半十郎には

為御參勤当表 御着ニ付

御目見被 仰付候事

と、鴻池永助、同彦市、同伴七等の手代達には、

連々他次郎御銀用向別而志を相立丈夫ニ相勤候付、いづれも格別出精仕候段被

聞召 御満悦被成候、此節被復以前蔵元被 仰付候付、猶重畳申合彌出精有之候様被

思召候事

と。

以上は参集の銀主関係者が藩主に面謁の折、中老より藩主の謝意として伝達したものとと思われるが、日記によると同じ御広間席において、重ねて重臣より口上を述べて謝意を表している、その内容が少しく具体的となり鄭重な点がある。藩主よりの言葉とも受取兼ねる点より見ると、藩庁重役として重ねて謝意を表している口上と認むべきである。格式が言葉、座席にも及んでいる当時としては、かかる煩雑な手続を要したのであらう。前にも藩主の御意として述べた山中常坦、山中他次郎への、この度の申渡を記すると、次のようになっている。

年来御蔵元受持御銀用向致出精、在勤役人中万端無覆蔵深切ニ申談、御間欠無之、御出入惣御銀主中存入も宜、連々

格別出精有之候故、聊御差支も無之候処、近年分而臨時御入方も繁敷候得べ、此上御銀談之道茂難相立次第ニ至候条、不得止事不本意之仕法相立置候而、追而有余之期年を得、元利返弁之節茂相立候積ニ而、去秋黒田淡路・加藤三郎左衛門登坂之上、惣元利置居之儀申談候処、乍難洩速ニ御請申出候、且又御蔵元之儀右仕組都合ニより、天王寺屋忠次郎兩人江被 仰付候処、難洩筋有之、委細願之趣無抛次第与相聞候付、願之通御蔵元御免被 仰付置候得共、近來御館入之由緒を以聊御用端相勤度旨、当春以来申出候付、乍迷惑出銀之義被 仰付候処、別而志を相立、御用御聞欠も無之出精仕候旨、彼是委被 聞召奇特之至被成 御満悦候、然ニ其元儀旧家与申殊ニ

御家風能相心得居候得べ、当時之通脇々江御蔵元被 仰付置候而者、差支も多且惣御銀主中より相願候次第も有之候儀一体之御借財仮成ニ御返弁之道も相立候而被

仰付候ハ、難洩ミ筋も有之間敷与役人中種々評議を尽候得共、昨年無体之仕法相立候程之折柄ニ候得べ、兼々存入も有之通、夫等之儀、何分不被及御手、極々迷惑之次第与ハ乍相察、以前之通其元一家之御蔵元被

仰付候処、是又速ニ御請申出候段被 聞召不淺次第

御満悦御安心被成候。右之通御世帯繰到而御六ヶ敷候得ハ、惣中江茂重疊申合、此先御為宜彌出精有之候様被 思召候事

とある。他の一例を天王寺屋忠次郎への口達にとって例証して見よう

是迄御当用御救方御蔵元被

仰付置候処、昨年以來臨時御入方多分之事ニ候得共、聊御差支筋も無之、格別志を相立出精之候段、委被 聞召御満悦被成候。御当用御蔵元之儀ハ、以前之通山中他次郎江被

仰付候様、惣中々願立候儀、無抛次第も有之、右ニ付而者其元厚存念之次第等申出候段、奇特之至被 思召候。依之被復以前御救方御蔵元被

仰付候付而ハ、不相替彌

御為宜出精有之候様被 思召候事

とある。

町家にも亦格式があつて、鴻池、加島屋、天王寺屋、近江屋、島屋の手代達十六名は、御広間縁側にて浦上彦兵衛より挨拶に及んだ、その口上の一例として、加島屋手代七郎兵衛外二名への口上を挙げると、

連々御銀用向銀方役人中江申談、格別出精有之候処、昨秋無拋次第二而一統之借財無休之仕法申談候末、久右エ門儀厚存念之趣申出候段、承之致大慶候。此先申合彌出精有之候様存候とある。

昨天保六年家老等重役が上坂して、銀主等と談合した巨細の条件は、未だ予は詳にし得ないが、恐らく元利据置年賦払辺であらうと思う。

さて然らば、此等の銀主衆に対して、藩主よりの土産物として如何程程度のものが与えられたか

一黒縮緬御羽織一 御肴一鉢

一黒縮緬御羽織一 御肴一鉢

一黒羽二重御羽織一 御肴一鉢

一黒羽二重御羽織一 御肴一鉢

一黒縮緬御羽織二 御肴一鉢

一黒羽二重御小袖一宛

長田作兵衛

島屋市兵衛

加島屋重郎兵衛

一麻御下一具宛

加島屋一郎兵衛

山中常坦

山中他次郎

広岡英左衛門

広岡久右エ門

天王寺屋五兵衛

近江屋久右エ門

近江屋休兵衛

天王寺屋忠次郎

近江屋権兵衛

永瀬七郎右衛門

加島屋安兵衛

一 金 子 百 足 宛	山 中 他 次 郎 手 代 二 人	天 王 寺 屋 伊 善	島 屋 伊 兵	同 宗 助	同 周 助	一 金 子 二 百 足 宛	同 九 郎	一 同 三 枚 宛	天 王 寺 屋 久 次 郎	同 万 七	同 伴 七	一 同 五 枚 宛	一 銀 子 十 枚	一 金 子 二 百 足	一 蠟 燭 百 挺	一 博 多 織 帶 地 一 筋	近 江 屋 權 九 郎	一 博 多 織 帶 地 二 筋 宛	牧 村 龜 次 郎	天 王 寺 屋 伊 太 郎
----------------------------	---	----------------------------	------------------	-------------	-------------	---------------------------------	-------------	-----------------------	---------------------------------	-------------	-------------	-----------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	--------------------------------------	----------------------------	---	-----------------------	---------------------------------

尾 張 屋 見 七 右 近 右 工 衛	鷹 見 右 近 右 工 門	為 川 半 十 郎	油 屋 万 助	近 江 屋 作 平	天 王 寺 屋 作 兵 衛	近 江 屋 与 兵 衛	加 島 屋 金 兵 衛	同 武 兵 衛	加 島 屋 七 郎 兵 衛	鴻 池 彦 市	鴻 池 永 助	天 王 寺 屋 平 次 郎	薩 摩 屋 仁 兵 衛	島 屋 市 十 郎	加 島 屋 一 平 郎	長 田 政 次 郎	食 野 次 郎 左 工 門	牧 村 清 郎 藏
--	---------------------------------	-----------------------	------------------	-----------------------	---------------------------------	----------------------------	----------------------------	------------------	---------------------------------	------------------	------------------	---------------------------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	---------------------------------	-----------------------

一 金子二百疋宛

鏡 屋 次 郎 エ 門

備 前 屋 権 兵 衛

となつてゐる。尙山中常坦、山中他次郎、広岡久右エ門、大文字屋五三郎には御膳を十月九日下さつた。

又此等銀主關係者より、大坂御着の御祝儀として差し上げた品を例記すると次の通りである。

一千鯛一折宛

山 中 他 次 郎

山 中 常 坦

一千鯛一箱宛

広 岡 久 右 エ 門

広 岡 英 左 エ 門

一交御着一折

一千鯛一箱

大文字屋五三郎

天王寺屋五兵衛

一千鯛拾枚宛

同 休 兵 衛

近江屋久右エ門

一鮮鯛一折双尾

長 田 政 次 郎

長 田 作 兵 衛

一千鯛一折五枚

一御慰斗蛇一把宛

天王寺屋忠次郎

近江屋権兵衛

油 屋 徳 三 郎

加島屋重郎兵衛

一御扇子一箱宛

加島屋一平

近江屋権九郎

加島屋一郎兵衛

一御慰斗蛇一把

加島屋安兵衛

天王寺屋伊太郎

一御熨斗匏二把宛

牧 村 龜 次 郎

牧 村 清 藏

一御扇子一箱宛

薩 摩 屋 仁 兵 衛

永 瀨 七 郎 右 工 門

島 屋 市 十 郎 衛

天 王 寺 屋 平 次 郎

鴻 池 永 助

食 野 次 郎 左 工 門

同 伴

同 加 島 屋 七 郎 兵 衛

同 萬 兵 衛

同 同 武 兵 衛

加 島 屋 金 兵 衛

同 同 武 兵 衛

一千鯛一箱

同 同 武 兵 衛

一御熨斗匏一把

繪 鷹 見 右 近 右 工 門

右は着坂の祝儀であるが、更に大坂御滞在御機嫌伺としての名義で、次の如くに献上物をなした。

一茶字御袴地一端

山 中 常 坦

一茶字御上下地一具

山 中 他 次 郎

一茶字御上下地一具

山 中 他 次 郎

一御舞扇一箱宛

山 中 他 次 郎

大文字屋 五 三 郎

山 中 他 次 郎

一御轡助一箱二掛 一御菓子一折宛

山 中 常 坦

近 江 屋 久 右 工 門

山 中 常 坦

一御轡 一箱二口

山 中 常 坦

一茶字御袴地一端

山 中 常 坦

一御鷹大緒二掛

山 中 常 坦

一御蒸菓子一箱長命糖

一御手綱二掛

一御轡助二掛宛

加島屋重郎兵衛

近江屋権九郎
近江屋権兵衛
油屋徳三郎

一御干菓子一箱

一御轡助一箱宛

加島屋安兵衛

加島屋一郎兵衛
加島屋一郎兵衛

一御轡助一箱一掛

一御轡助一箱二掛

一御轡助一箱一掛

天王寺屋伊太郎
牧村清蔵郎
牧村亀次郎

尙此の外に、山中他次郎外四名は「御内々差上物」として差出しているのは、左の通りである。

一御舞扇一箱

一茶字御上下地一端

一御手綱一掛

一千歳すし一箱紅白

長田作兵衛

山中他次郎
山岡久右衛門
天王寺屋五兵衛

一御菓子一箱

又山中他次郎は、御蔵元再勤并御加扶持仰せ付られたる御札として、

一生鯛一折

一縮緬三卷紅白二

御加扶持之御札

一御酒 一荷

長田政次郎
天王寺屋忠次郎

一羽二重二疋紅白

天王寺屋忠次郎は当春御加扶持仰付られた御札として

一御着一折

一鼠色羅紗御羽織地一箱

を差し上げたのである。

尙山中他次郎が御蔵元再勤につきての特別の差上物に対して、返札としては鯛一折を差し遣はされている。

序に一言しておくが、天保十二、三年に亘る水野越前守忠邦の天保改革の発令によって、此等絹類の使用が禁止せられたので、其代品の撰定に藩重役并に大阪在勤の藩吏が苦心して居ることが藩の記録に見えて居る。

此等銀主への被下物と、大坂在勤の幕府遠国役人への進物とを比較参考の為、次に記して見ると、

御城代土井大炊頭に、

一御太刀金馬代

一紗綾十卷

町奉行跡部山城守、川口奉行本多大膳に各

一御太刀銀五枚馬代

両町御奉行家老四人、用人四人に各々

一銀子三枚

川口御奉行家老一人に 一銀子二枚

御出入与力十人に 一金子三百疋宛

川口御船方与力二人、御出入同心二人、御破損方手代一人に各々 一金子二百疋宛

過書方上役に各々 一銀子一枚宛

今村休右衛門に 一金子二百疋

過書方下役之内引切受持二人 一金子二百疋

右引切受持々内一人に別段 一金子百疋

過書方下役五人に 一青銅三貫文

と記載されている。

そして藩主齊溥は、十日七時早メ供揃して、大坂を發し、陸路、森小路、佐田小休、牧方昼休、楠葉、淀小休の上、七時過伏見に着し、北国屋新右衛門宅に入って止宿したのであるが、京都には聞役もいるし、銀主出人商人として大文字屋五三郎、鎰屋九右衛門、万屋源蔵、升屋彦右エ門、升屋喜六、薩摩屋喜右衛門、井筒屋安八、吉文字屋彌右衛門、大文字屋三右衛門、平野屋彌太郎、津島屋彌平、津島屋彌太郎、等がいる。幕府役人として所司代、町奉行の面々もいるし、別けて黒田家の縁家として二条左大臣家がいられるので、一通りならぬ手数を要したものであった。